三色ボールペンを活用した説明文の指導
―「ホタルの里づくり」を通して―

東京都板橋区立高島第一中学校
増川　孝

五年程前に『三色ボールペンで読む日本語』（齋藤孝著、角川書店）を読んで以来、私は日常生活において三色ボールペンを愛用している。三色ボールペンとは青、赤、緑の三色から成り、文章を読む時に「まあ大事」と思ったところには青線を引き、「すごく大事」と思ったところには赤線を、「おもしろい」と思ったところには緑線を引きながら読んでいくというものである。これで線を引きながら読んでいくと、集中力が高まり、文章の内容がぐいぐいと頭の中に入ってくる。また、後でその文章を読み返すときも三色の線が入っているととても役立つ。青線や赤線により文章の要点が浮き彫りになっているし、自分にとって大切だと思った箇所が赤線や緑線ですぐに見つけられるからである。他にもいくつかの効用があるが（齋藤氏の著書参照）、そうした効用を体感した私は三年程前から三色ボールペンを国語教室に取り入れている。これから紹介するのはその一例である。

単元「自然環境について考えよう」

〈つけたい力〉

○説明文の文脈を読みとる力
○説明文を心に響かせながら読む力

〈学習の流れ〉

（一次・3～4時間）

①「ホタルの里づくり」（『現代の国語2』）を各自黙読し、三色ボールペンで線を引く。

青線→話の筋をとらえる上で大事。
赤線→筆者の主張をとらえる上で特に大事。
緑線→興味をもった。心に響いた。

②意味段落（教室では「内容のかたまり」と呼んでいる）、引くべき青線、赤線を確認する。

＊生徒に答えさせながら適切な箇所を確認していく。確認された箇所には蛍光ペンの青、赤を入れさせる。これにより生徒は自分の引いた線が妥当であったかどうかを確かめる。

③確認された線をもとにして意味段落毎に小見出しをつけ、話のおおよその流れを把握する。

＊最初は教師がまとめて小見出しとはどういうものかを理解させる。その後は生徒自身にまとめさせ、答えさせながらふさわしい小見出しを確認していく。

④各自が引いた緑線を発表し合う。

＊緑線はどこに引いても自由。青線や赤線と重なってもかまわない。教師はどんな箇所についても共感的に受けとめる。どういうことからその箇所に緑線を引いたのかをコメントできる生徒にはコメントさせる。発表を聞きながら特に共感できる箇所には蛍光ペンの緑を入れさせる。教師が緑線を引いた箇所も適宜示し、コ

メントする。

⑤同様の流れで「魚を育てる森」「『めぐる輪』の中で生きる」を読む。

（二次・1時間）

⑥三つの文章の中で引いた緑線のうち、特に自分の心に響いた緑線の箇所（これを「感動系の緑」と呼んでいる）にコメントを記入し、それを発表し合う。

（三次・1時間）

⑦三つの文章を読んだことをもとにして「自然環境についての私の考え」という内容の文章を四百字程度で書く。

＊感動系の緑の箇所を引用し、それに自分の思いや考えを重ね合わせながら書くと書きやすいことを示す。ここで「引用」のテクニックを教える。

（事後）

⑧書いた文章を文集にまとめて互いに読み合う。

私は説明文の指導においてはこのような流れを基本としている。説明文は読みながら文脈をたどれること、自分の思いや考えを重ね合わせられることが何より大切だと考えるからだ。そのためには三色ボールペンを活用したこのような学習活動を反復させることが効果的だと今現在は考えている。ご教示頂ければ幸いである。

生徒作文例

「ホタルの里づくり」で大場さんは「指の間からのぞいて、ほのかな光を放つホタルを見たときの感動は、たとえようもなくすばらしいものでした。」と述べていた。私は野生のホタルなどつかまえたこともないのにここを読んだときにこういう場所が増えたらいいなあと思った。

今の私たちの生活は便利で豊かだ。しかし、人が手を加えすぎてできた便利な場所よりも、動植物が助け合いなら生きている自然の場所の方が私たちにとっては心が安らぐと思う。三つの説明文はどれも人間が一度壊してしまった自然環境を再生しようとしている人々のことが書かれていた。

〜途中略〜私はこの地球上全ての生物が互いに協力し合って生きていけるバランスのとれた世界をつくっていくべきだと思う。今そのバランスが崩れつつある。それは人が人だけの世界をつくろうとしているからではないか。〜以下略〜」

ますかわ　たかし　教師には深い呼吸が必要だと考え最近ヨガを始めた。今では必須アイテムとなっている。学校でも家でもイライラすることがなくなった、ような気がしている。